

氏名	李 承ヒョン
ヨミガナ	イ スヒョン
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第428号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 鍛金による祈りのかたち 〈作品〉 祈りのかたち I 祈りのかたち II

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	篠原 行雄
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	小松 佳代子
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	丸山 智巳
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	飯野 一朗
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	橋本 明夫

（論文内容の要旨）

人間の生活に美術が成立したのは何故なのか。人間がイメージを創造した歴史の中で何を美術の初期形態と見るかに関しては様々な説がある。筆者は本論文で、後期旧石器時代の洞窟壁画のように、人が祈りをする行為から美術が始まったという説を前提にして論を進めた。人間が生存のため本能的に祈りを行う際に、それを形象化するイメージを創造したことが美術の始まりであると考えている。現在の我々が行っているイメージ創造の行為も、何らかの祈りを形象化するためなのではないかという仮説がこの研究の始まりである。

本論文の目的は、祈りの形象化として美術制作を捉え、筆者が鍛金という金属工芸技術を用いて造形することが祈りの行為であることを明らかにすることにある。様々な祈りの行為の特徴と鍛金作業の類似性について考察し、修了作品の制作過程と選択したモチーフや技法の意味を考察することで、筆者の制作行為が祈りの形象化であることを明らかにする。

第1章では、祈りの形象化に使われる象徴について論じた。祈りが心の中で行われるだけでは抽象的な概念に留まり具体的に表現することは難しい。ところが、祈りが言葉や行為、あるいは造形を通じて形象化されると、心の中で密に行われるのとは異なる影響力を持つようになる。第1章では、様々な祈りの行為に観察される共通の要素として反復や昇華に着目して本論文における祈りの概念を説明した。第1節では、繰り返して拝むことや石を重ねて祈ることなど祈りの儀式で行われる反復的な行為について考察し、それらが石塔や祭祀での供物などのように垂直方向に重畳されるかたちへ繋がることを論じた。第2節では、祈りの儀式として行われる風灯飛ばしや焚祝などを例に、人間の祈りが神に伝わる、祈りの昇華という概念について述べた。目に見えない昇華の瞬間を感じるには、かたちとして理解される必要がある。他の次元への移行を意味する昇華を人々がより強く共感するために、造形や音楽、踊りなど、芸術は良い媒体であることを述べた。

第2章では、筆者が鍛金という金属工芸技術を用いて祈りのかたちにする作業を行う意味を考察した。第1節では、祈りを形象化するのに筆者が金属を用いる理由を明確化した。採掘と精錬の過程を必要とする金属はシャマンの火を扱う能力と結びついて神聖な存在として位置づけられ、祈りの儀礼の道具としても用いられる。その意味で祈りの形象化に適した素材であることを論じた。第2節では、祈りを形象化する手段として鍛金という制作技術が持つ意味について論じた。金属素材の神聖視に伴って、火を使って金属を扱う鍛金技術も超越的な力によるものと思われるようになる。筆者が実際に制作を行いながら感じた金属素材と鍛金技術の特性について、第1項では鍛金作業の反復的な行為、第2項では金属素材で表現できる可変的なイ

メージと関連させて考察した。

第3章は祈りを形象化するために用いたモチーフの考察である。筆者が火のイメージを借りて祈りを形象化ようになった背景と最終的に制作した作品の意味について論じた。第1節では、韓国での修士課程の作品から日本で制作した博士課程の作品まで、祈りを形象化してきた過程を説明した。特に、祈りという抽象的な概念を表現するためのモチーフが、水辺の石から未熟な形、鳥へと変化してきたことの意味を検証した。第2節では、祈りのかたちとして火というモチーフを取り入れるに至る経緯を述べた。第1項では、人々がかたちを見てあるイメージを感じ取り、それが特定の象徴として伝わる過程について考察した。第2項では、火のかたちを借りて修了制作をするようになった背景を、韓国と日本の古代遺物に見られる火炎紋や火焔土器などを例に、火が神聖性を象徴することから説明した。第3節では、修了作品の制作過程やその意味について述べた。修了作品で目指したテーマと、それをかたちにするために必要とした制作過程を跡づけた上で、その形や色がいかなる意味で祈りの形象化であるかを明らかにした。

終章では、本研究と作品制作を通じて得られた成果と今後の課題を述べた。自分の成長という個人的な祈りをテーマにしていた過去から、祈りそのものをテーマにして制作するようになった現在まで、筆者の思考に影響を及ぼした環境的な変化のなかで、様々な試行錯誤や内面の悩みを経験しながら制作を続けることが「鍛金による祈りのかたち」の研究に繋がり、作品1、2の成果を生み出したとまとめた。最後に、作品を制作、展示することで望みの通り私の祈りが昇華されたのかについて反省し、本研究で得た成果を土台に、多様な可能性を試すため積極的に制作に邁進することがこれからの課題であることを述べた。

本論文は以上のように、筆者の制作に対する考え方を整理し、それを土台に実際の制作に取り組んだ過程の意味を明らかにすることで、筆者自身が持っている造形への哲学を「祈り」というキーワードでまとめた。祈りは、古代から人間の造形行為と密接に結びついてきた概念であり、筆者自身にとっては鍛金という技術の特殊性や環境的な要因とも結びついて、強く意識するようになったものである。修了制作とともに本論文は、これから続く制作活動の出発点に位置づくものである。

(博士論文審査結果の要旨)

提出論文は、鍛金という金属工芸技術を用いて造形することが祈りの行為であるという仮説に基づき、祈りの儀礼、金属素材や鍛金技術と祈りとの関係性について文化史的な観点から論じたうえで、修了制作のモチーフや技法について論じたものである。

まず、先史時代に作られた洞窟壁画や石彫遺物などの造形物の意味について考察し、それらが祈りの儀礼と深く結びついていたことを導き出す。日常から離れた目的で制作され、人に心の変化を及ぼすものを美術と位置づける。人間の内面にある祈りの形象化と、造形物の共有による祈りの昇華の過程を美術制作と重ね合わせる、独自の美術観を打ち出していることを評価したい。

第1章では、筆者の出身地である韓国と、現在生活している日本を中心とした東アジア文化圏における様々な祈りの儀礼を観察し、そこに見られる反復という行為が重量という形象をもたらすことを見いだしている。反復が心の安定につながるという心理学の知見を援用して、願い事を叶えるために石を積むことや拝を重ねる行為の意味を分析し、反復行為によって現れるかたちが神聖性を付与される経緯を明らかにしている。垂直方向へ向かう重量という造形的なイメージは、祈りを天上の神に聞き届けてほしいという人間の心を表現するものであると述べる。願い事が書かれた紙を燃やして飛ばす、風灯飛ばしや焚祝などの儀礼を高い次元へ祈りが移行していく瞬間を象徴するものと捉え、祈りの昇華と位置づける。厳粛で静的な儀式の後に、飲食や踊りなどで楽しむことは、内面の祈りが外へ発散されるカタルシスであり、その媒体として芸術が重要な役割を果たしていることを論じる。このように具体的な事例を通して祈りの意味を独自の観点から分析することで、祈りの形象化という筆者の制作研究の基盤が明確化されている。

第2章では、筆者が鍛金という金属工芸技術を用いて制作することの意味について考察している。まず宗教学者M. エリアーデの議論に依拠して、金属素材が神聖性を付与されてきた背景を述べる。金属は隕石や大地母が宿る地下の鉱脈から発見されたことで神聖視され、さらに精錬の過程が必要であることから、精錬技

師や鍛冶師は火を用いて超越的行為をするシャマンと重ね合わされる。それゆえ金属製の酒器が祭祀で用いられ、神を呼び出す儀礼の道具も金属製であり、神と人間とをつなぐ媒体として金属が重要な役割を果たしていたことが論じられる。また、鍛冶師が金槌を使って金属を叩く行為は、その音とも相まって神の怒りである雷に喩えられることで神聖視される。このように金属やその加工が超越的な存在と結びつけられてきたことから、鍛金技法による祈りの形象化という筆者の制作研究の意味が説得的に論じられている。

第3章では、筆者の修士課程以降の制作研究の展開と、修了作品の制作過程及びモチーフの意味が論じられる。祈りのかたちであることは一貫しているが、それを表現するモチーフは水辺の石から鳥、そして修了作品の火へと変化してきた意味が具体的な作品とともに提示される。筆者にとって作品制作それ自体が、内面に閉じ込められている祈りを具体的な形へと置換することであるため、何をモチーフとしていても祈りのかたちであるが、第1章及び第2章で論じられたように祈りの昇華や金属の精錬・加工において火が用いられることから、祈りの形象化として火というモチーフは必然的に導き出されたとも言える。縄文時代の火焰土器を保管機能や装飾性よりも「人間の強い祈り」の表現と捉え、火焰の動きを示すダイナミックな線の表現にも着目して修了作品が制作されたことが、具体的な制作工程の説明とともに論じられる。蠟燭の火のような作品1は個人で静かに祈るイメージを、火焰土器をモチーフにした作品2は祭などで人々が祈りを共有し感情を発散させるイメージで制作されたという。制作研究が理論研究における祈りのかたちについて、再度深く考察することにつながっている。

提出論文はこのように、筆者の制作意図から制作過程へと展開し、制作した作品から制作における思考を見直すというダイナミズムによって、制作者が自らの制作について理論的に考察することの意義を存分に示している。審査会において慎重に審査した結果、本論文は課程博士論文として相応の水準に達していることが認められ合格とした。

(作品審査結果の要旨)

申告者は研究作品について、縄文時代の火焰土器をモチーフに、古代と現代或は、主に東アジアの国境をこえた人々と祈りの共通関係を考察し自己の研究技法である鍛金技法を用いて金属造形作品による研究作品を完成している。

提出した研究作品は、「祈りのかたち1」銅 200×200×700(mm)と「祈りのかたち2」銅 500×500×700(mm)の二点である。

まず、その技法の特徴である火を扱い鎚で金属を反復し打ち締めて整形してかたちを造り上げていく行為を人々が反復して祈りを昇華させようとする行為とが作者の中で重なり鍛金という技術と祈りのかたちというテーマとの関係性を視覚化してかたちにした。

つぎに、積み上げて祈る儀礼行為と金属を繋ぎ合わせて構築していく鍛金技法の性質を表面のディテールのリブ状の線で接合することで表現した、その線は燃え上がる火焰の揺れ動く流れの表情とつながり研究作品のモチーフである火焰土器のディテールからの着想につながるが、本来縄文時代の火焰土器の燃え上がる火焰のイメージを表現しているディテールの線は、対象という規則がある。しかし研究作品のそれは金属素材と鍛金技法間の持つ関係を作者の感覚で読み取り様式に拘らずに自由な火焰の上昇の流れを効果的に表現している。

そして、提出した二作品の「祈りのかたち1」は、祈りの中でも個人的な祈りを表現した作品で密やかな日常的イメージを小さな金属片を非規則につなぎ揺れ動く蠟燭の炎に喩えて表現されている。いっぽうの「祈りのかたち2」は、集団的な人々の祈りを表現した作品で前述した火焰土器からの影響が強く出ている作品である。これらの研究作品は、鍛金技法による制作過程の反復する行為から増殖されていく様を成長という生命感と捉えることと反復し行われる祈りとの相関性を導き芸術的創作の可能性を試みた作品は評価するも

のであり今後の展開が、期待される。

(総合審査結果の要旨)

金属工芸技法である鍛金の制作における意味を独自の視点から論じた論文とそれに基づき並行して制作された作品についての審査を行った。

論文は、アルタミラ洞窟の後期石器時代の人間の生活の痕跡の考察から始まり、エルンスト・ゴンブリッチの「芸術と幻影」から人間はある物を見る時に自身の既に見たことのあるイメージを投影して考えるという投射論という概念を取り上げ、岩盤に動物の形を見出しそれに手を加え自らの手でイメージを創造するようになり、そのイメージの創造が祈りの儀礼をおこなう為の手段となったという考えを構築し、美術の根源的な段階からの考察を試みている。人のこころに変化を及ぼす力を持つ存在を美術と位置づけ人間が外部に形として表現し観衆者と共有することで表現しようとした事を昇華させる事が可能であるという考えに至っていく。

祈りの行為を美術の始まりとする考えから鍛金という金属工芸技術を用いて造形する事の意味を結び付けて独自の美術観を打ち出している事が評価された。

作品は、祈りににおける反復、重畳や火を用いて昇華の意味を持つ儀礼から制作における形象化のヒントを得、また神と人間をつなぐ金属という物質についての役割等について考察され、それらを通してモチーフの選択、制作工程に至るまできめ細かな考えが示されている。

制作過程については環境の変化に耐える受動的な自身の成長の祈りのかたちから鳥をモチーフにした能動的意志を表現した祈りのかたちへと変化し、直接的に祈りのかたちを象徴した火をモチーフにしたものへの過程が述べられている。

提出作品である蠟燭の火をモチーフにした「祈りのかたち1」、より多くの人と共有できる形として火炎土器をモチーフにした「祈りのかたち2」は、鍛金における創作の可能性を試みた作品として評価された。

本博士課程において自身の造形について素直に考察し美術の根源から堅実に構築していった論文、作品ともに評価され、課程博士として相応の水準に達していることが認められ合格とした。